

## 「魚」と「舟揚場」の方言

永江 秀雄

前号の藤本良致氏の「魚」の方言について「にちなんで、私は「魚」そのものの方言について述べてみたい。

本県では「魚」をサカナと呼び、また幼児語としてトトと言うことも一般に通用しているようであるが、更に一部の地方ではイオとかそのなまりと思われる言葉が用いられている。すなわち、私の調査した所では県下の海岸線の二十数箇所の中、敦賀・小浜・三国・四箇浦を始め各市郡に渡る十数箇所ではイオ・ユオ又はイヨ等が用いられているのである。「いを」は源氏物語や和名抄にも見えており、「うを」は古言「いを」の転であるとも言われているが（『言海』）、現代の共通語としては既に忘れ去られたかゝる言葉が我々の身近に語られていることには感慨を禁じ得ない。

また、イオと共に「魚ぐし」のことをイオグシ・ユオグシ又はユグシ・ヨグシ等と呼ぶ所が多く、既にイオやユオは用いないでただイオグシやヨグシにその名ごりをとどめている所さえある。そしてこれらの言

葉は主に漁業者、それも中年以上の人に多く用いられているらしいことも注意されねばならぬ。なお、イオの発音は io. と言う所もあるが、iow. と考えられる地域もあり本来のフ行音をとどめるものとして音韻的にも興味が深い。

次に、海岸における「舟揚場」の方言名について略記したい。越前の海辺ではこれをマと呼び、その制度とか所有権等の経済的な問題はしばしばその道の人々によつて論じられているようであるが、マという呼称は坂井郡から南条郡までのほとんどすべての漁港において用いられている様子である。すなわち私の調査した嶺北海岸線の十二箇所の中、最南端の河野村大谷におけるフナゴヤと、最北端の芦原町波松のフナツケバ・フナアゲバを除けば、中間の十箇所はすべてマと呼ぶとのことであつた。三国町雄島では「波打際から高さ四、五間乃至十間ぐらまでの、船の中の三倍ぐらいの面積を世襲している」というが、各地のマも大体同様の構成を有するものであろう。敦賀市より若狭の全海岸線では現在どこにもマは聞かれないようである。すなわち、ここ嶺南の漁港においては「舟揚場」

は多くフナバ・フナゴヤ、又はフナヒキバ・ヒキバ等とも呼ばれている。フナゴヤとは舟を小屋へ入れるゆえの名称である。

ただし、敦賀市北端の大比田では、今はフナバ・フナゴヤを用いるが、古老の言によれば「昔の人の語に、マがあつた」とのことである。更に、昨今になつて始めて聞いたことであるが、小浜市の田島でも陸上の舟置場はフナバと言うが、海上の風波を避けて舟をつなぐに便利な入江などをマと呼び、「越前の方へ行くと良いマがないので舟をつなぐのに困る」などと語っている所である。この一事からしても「マ」について調査すべき課題はなお多いと思われる。

東条操編『全国方言辞典』にはマのことも魚のイオも見えていないが、恐らく舟揚場をマと呼ぶのは本県嶺北地方に限らず、また魚をイオ・ユオ等と呼ぶことも若越海岸にとどまらないものと想像される。なお、福井漢文学会の道関与門氏はイオの起原を「中国語 魚 (魚) から来たもの」と説き、『人間の歴史』の著者安田徳太郎氏は「原マレイ族のイワとかイア(魚)に結びつく」と述べている。ともに傾聴すべき意見ではあるが、にわかには信じ難い。

最後に、私は「魚」「舟揚場」の方言とも、海浜以外については全く調査していないことをおことわりしておく。